

書名 「だから女はダメなんだ」と言われない女性リーダーの心得  
題 女性の躍進のために

男女雇用機会均等法が施行されてから、30年という月日が流れた。この30年間、日本では女性が活躍できる社会を作り上げるために数多くの試みがなされてきた。「男が外で働き、女は家事育児をする」のが当たり前だった時代はもう過去のものとなり、共働きの家庭や、家事育児を夫に任せ働きに出る女性も続々と増えている。去る7月31日の東京都知事選挙では、小池百合子氏が当選を果たし、初の女性都知事が誕生した。今や女性は格段に動きやすくなり、活躍の機会を与えられるようになったように思える。しかし、内閣府発行の「男女共同参画白書 平成28年版」によれば、就業者に占める女性の割合は4割を超えているものの、管理的職業従事者に占める女性の割合は12.5%と低い数値にとどまっている。働く環境が整ってきたことは間違いないが、リーダーや管理職を務められるような女性人材の育成はまだ不十分なのではないだろうか。私は、「女性の活躍の推進」というテーマに対し、「リーダーとして働く」という活躍の形に焦点を当てて、本書を手にした。

なぜ管理職の女性が増えないのだろうか。共働きの家庭においても家事や育児の負担が妻に大きく偏る傾向にある現状では、仕事に十分な時間を割くことができないからだろうか。結婚や出産を機に退職するという刷り込みが、女性を管理職選抜の対象から外しているからだろうか。管理職に就いた女性の前例や、それを目指し活躍する先輩や上司が少ないために、手本にできる存在がおらず、女性自身が管理職になることに消極的になっているからだろうか。どれも、原因の1つではあるだろう。この中で、会社と家庭における時間配分や働き方についての刷り込みは、女性だけの力でどうにかできるものではない。女性を取り巻く周囲の理解、許容、協力などを必要とするものである。しかし、女性自身の考え方、意識だけは、女性自身の力で変えていくことができる。むしろ、本人にしか変えられない、と言った方が正しいかもしれない。周囲がどれほど働きかけようと、最終的に意見を変えるという決断を下す決定権を持っているのは自分だけだからである。冒頭でも述べたように、女性が働きやすい社会作りは着実に進んできている。働く女性の身に降りかかる問題は新聞やニュースでも頻繁に取り上げられ、改善策を練らなければならないといわれている。政府も指導的地位を持つ女性を増やすべく、具体的数値を含めた目標を掲げた。働く環境を整えようと活動がなされている以上、女性も積極的に管理職を目指していくべきだろう。

本書には、リーダーや管理職を目指す女性にとって必要な心構え、考え方に着目した、数々のアドバイスやメッセージが掲載されている。人材教育をサポートする会社の社長でもある、著者の古谷治子氏自身の社会経験に基づいた言葉である。女性リーダーのロールモデルがないことに悩む女性にとって、この上なく心強いものとなっている。さらに、本書は全ての働く女性、そして女性を雇用する立場にある人も意識した内容となっている。女性リーダーに馴染みが薄いのは、リーダーを目指す人だけではない。彼女らを雇う人、共に働く人にとっても、理解を深める機会を与えるこ

とができるだろう。

私は会社員の父と専業主婦の母の間に生まれ、完全な分業制を見て育ったのだが、私自身は将来専業主婦ではなく、社会で働いて生活をしていきたいと思っている。しかし、リーダーや管理職といわれるような役職に就きたいかと言われるとそうではなく、なぜか漠然とそういった地位に就くことはないと考えていた。その理由が、本書を読んだことで明らかになったと感じている。私の中には「管理職に就くのは男性である」という考えが無意識のうちに根付いていたのではないかと気づかされたのだ。思えば私は、「女性だから」という理由で事あるごとに逃げてきた。体力や筋力の低さ、感情的な性格、どれも「女性はそういうものだから仕方がない」と、大した努力もせずに言い訳を続けていた。小池氏の何でも自分で考え、限界を決めずに挑戦し、成し遂げたいと思ったことの為に努力を惜しまない姿を見ていると、今まで性別ばかりに責任を押し付けて逃げ回っていた自分の生き方がひどく恥ずかしく思えた。

「女だから」を理由に、甘えてはいけない。女性が働く社会に対し、男性も女性も、もしかしたらまだ不慣れであるのかもしれない。しかし、高い志を持ち、確固たる信念や目標のもとに努力し、互いの気持ちに寄り添い理解しようとする姿勢を取り続ければ、必ず女性がより幅広い世界で活躍するための一歩となるだろう。私も小池氏のように、自分の可能性を狭めて諦めず、目指すものの為に現状に妥協せずに、自ら新しい世界を切り拓く覚悟を持って生きていきたい。